

『itahcara(イタハチャラ)』第4号

2004年12月20日発行

編集・発行

『itahcara』第4号編集事務局 田村将人

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学文学部

日本文化学科ユーラシア言語文化論講座

印刷所 山藤印刷株式会社 Tel(011)-661-7161

トンコリの演奏にみられる前世代の演奏者との共通点について

篠原 智花

1. はじめに

1-1 トンコリ演奏における「伝承」

トンコリの演奏において伝承されている要素はあるのだろうか。文献においては江戸時代からトンコリの記述がみられるが、録音資料では最も古いものが1903～5年のB・ピウスツキ録音、内容が聞き取れるものとなると1935年の久保寺逸彦氏録音ということになり、現在から70年ほどしか遡ることはできない。ここでは数少ない録音資料をもとに、第二次世界大戦前に樺太で教えをうけた演奏者のうち最も世代の若いN・U氏と、それより前の世代の演奏者との共通点を探してみたい。なお演奏者の氏名に関しては、姓・名の順でイニシャル表記とした。N・U氏は複数のトンコリ演奏者に師事したが、K・C氏はそのうちの一人であることを付け加えておく。

1-2 先行研究と資料

トンコリの演奏法に関する先行研究としては、谷本一之氏・近藤鏡二郎氏・富田友子（歌萌）氏・千葉伸彦氏らの報告がある。トンコリ演奏の録音資料については、B・ピウスツキのロウ管録音（1903～5年）、久保寺逸彦氏のアルマイト盤・ベークライト盤録音（1935年）、小泉文夫氏による録音（1967年）、日本放送協会による録音（1951年・1961～2年）などがある。今回は、現在試聴が可能な久保寺氏録音・小泉氏録音・日本放送協会の1951年の録音（『樺太アイヌの古謡』としてレコード化されている）を主に利用した。引用した録音の収録地については、久保寺氏録音が樺太の落帆と新聞、小泉氏録音が網走である。日本放送協会録音の収録地は不明で、おそらく北海道内と思われる。なお、本文中で引用した久保寺氏録音の曲のタイトルは、北海道立図書館の久保寺氏収録音声資料目録の記載に基づいている。

1-3 トンコリの演奏における音楽的内容

現存する録音資料には、曲名が同じ曲は存在する。それらの曲は、似ているものもあるし似ていないものもある。ただし、内容が全て同じであるものはない。音階も異なっている。本稿では、録音資料中の音階と曲の比較を試み、曲のフレーズ・リズムなどの共通要素を示した。

2. 音階と調弦

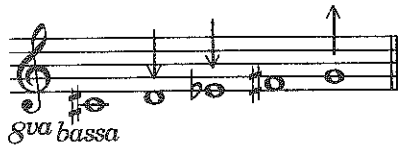
2-1 音階

N・U氏はもちろん、ここにあげるほとんどの演奏者が弦には三絃用の絹糸を用いていたと思われる。絹糸は湿気の影響を受けやすいだけでなく伸縮率がたいへん高いため、演奏が進むにつれて音が狂いやすく、演奏中に半音～全音程度の音程の狂いは否めない。ここでは基本的に曲の冒頭部分の音階をもとにして、音の高め・低めに関しては矢印（↑高め・↓低め）で表記した。括弧内の音は前に記された音と交替し得る音である。なお譜例は見やすくするためにト音譜表に統一したが、8va bassaの記号通り実音は1オクターブ下である。それぞれの演奏者について、利用した録音資料名を文末注に記した。

1. N・U (1901~1977 樺太・小田寒出身) ¹



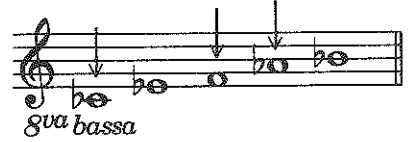
2. O・E ²



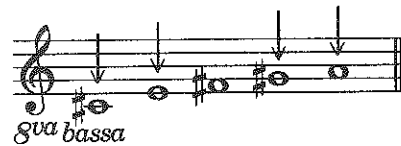
3. O・Y① ³



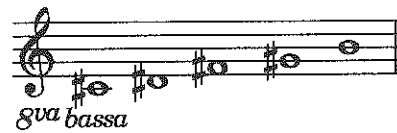
4. O・Y② ⁴



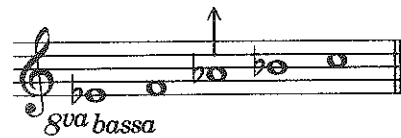
5. H・M ⁵



6. S・K (1881~1961 樺太・小田寒出身) ⁶



7. K・C (1890~1977 樺太・小田寒出身) ⁷



8. F・H (1900~1974 樺太・恵須取出身) ⁸

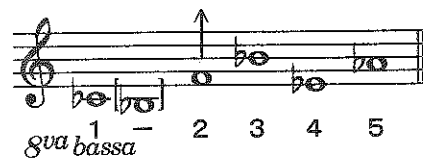


ここで気が付くのは、N・U氏とO・Y氏②の音階はほぼ同じということである。

2-2 調弦

調弦についての資料がある演奏者のみ記す。譜例の下の数字は弦の番号である。番号は、糸巻き部分を上方に正面から楽器を見て、左の弦から右へ順番に1・2・3・4・5となっている。

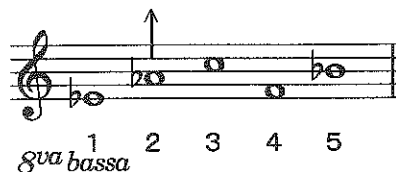
1. N・U



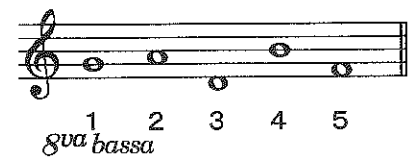
2. S・K ⁹



3. K・C



4. F・H



F・H氏以外の3名は隣り合う音同士の音程関係が類似して、違いがあるとしても短2度程度の範囲内に収まっている。

3. 同じテーマを持つ曲の共通点について

音階については2-1の譜例に準じる。資料によっては、演奏中の弦の伸縮による音程の狂いはもちろん、もとのレコードやテープの状態が良好でないため、曲が進むにつれて速度・音程の誤差が生じているものもあることをご了承いただきたい。楽曲の調性に関しては、西洋音楽の定義に必ずしもあてはまらないため、調号は必要な音のみにつけた。利用した録音資料は、脚注があるものを除き2-1の音階で用いたものと同じである。

3-1 sumari (狐)

曲名にsumariを含むものと、曲名は不明だがsumariに関する曲と思われるものをあげてみる。

1. N・U sumari puu kosan

Musical score for 'sumari puu kosan' (N・U). The score is written in 2/4 time with a tempo marking of 100. It consists of three staves of music. The first staff starts with a treble clef, a key signature of one flat (B-flat), and a common time signature. The music features a series of eighth and quarter notes, with some notes beamed together. The second and third staves continue the melody, with measure numbers 7 and 13 indicated at the beginning of each staff. The word 'gua bassa' is written below the first staff.

2. O・Y② 曲名不明

Musical score for 'O・Y② 曲名不明'. The score is written in 2/4 time with a tempo marking of 120. It consists of three staves of music. The first staff starts with a treble clef, a key signature of one flat (B-flat), and a common time signature. The music features a series of eighth and quarter notes, with some notes beamed together. The second and third staves continue the melody, with measure numbers 7 and 13 indicated at the beginning of each staff. The word 'gua bassa' is written below the first staff.

3. O・E shumari pu kosan

Musical score for '3. O・E shumari pu kosan'. The score is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 2/4 time signature. It consists of three staves. The first staff starts with a tempo marking '♩ = 138' and the instruction 'gua bassa'. The melody is characterized by a series of eighth notes with a steady pulse. A star symbol (★) is placed below the first staff at the end of the first measure. A second star symbol (☆) is placed below the second staff at the end of the second measure. The third staff continues the melody with similar rhythmic patterns.

4. K・C sumari cis

Musical score for '4. K・C sumari cis'. The score is written in treble clef with a key signature of two flats (Bb, Eb) and a 2/4 time signature. It consists of three staves. The first staff starts with the instruction 'gua bassa'. The melody is characterized by a series of eighth notes with a steady pulse. The second and third staves continue the melody with similar rhythmic patterns.

N・U氏とO・Y氏②は音階がほぼ同じであるだけでなく、一部メロディーラインも酷似している。わかりやすくするために、O・Y氏②の譜例のはじめの部分を、小節線を半拍分後に移動してことにする。

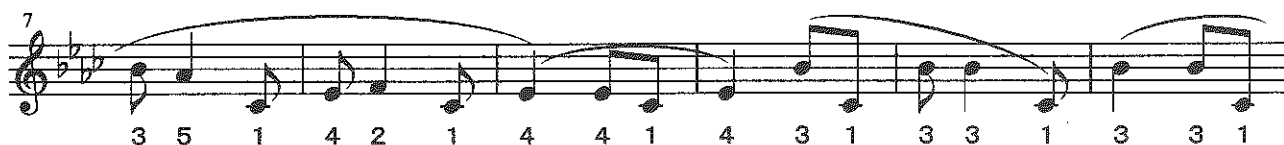
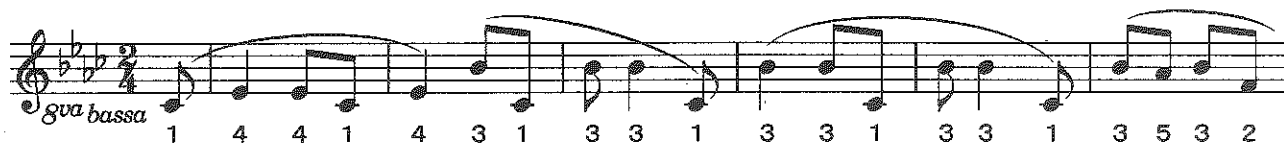
A musical score showing a comparison of rhythmic patterns. It is written in treble clef with a key signature of two flats (Bb, Eb) and a 2/4 time signature. The score consists of a single staff with a series of eighth notes. The rhythm is similar to the patterns seen in the previous scores.

O・E氏の譜例をみると、★で示したフレーズが繰り返しあらわれていることがわかる。このフレーズのリズムはN・U氏の冒頭のフレーズと同じである。☆で示した部分は★が2回繰り返されているが、その部分の小節線を半拍分前にずらしてみるとO・Y氏②の譜例の冒頭のフレーズと似たリズムであることがわかる。

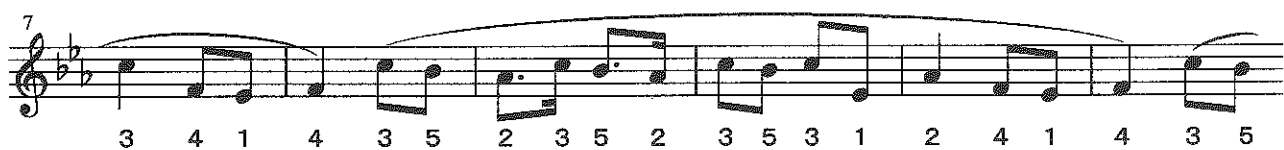
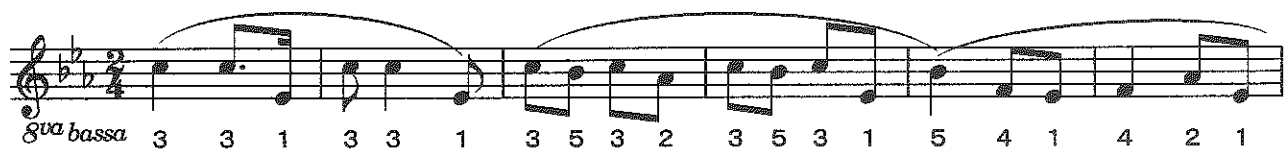


N・U氏とK・C氏については、演奏する弦の番号を表示してみると音は違っても同じ弦を弾いている部分があることがわかる。

N・U sumari puu kosan



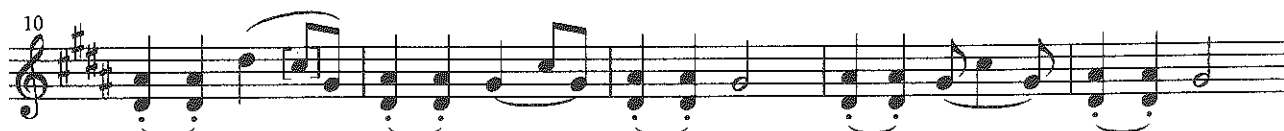
K・C sumari cis



3-2 too kito ran ran

久保寺録音の中に、曲名は不明であるが too kito ran ranと思われる曲が2曲含まれているので、N・U氏の演奏例とあわせてあげてみる。2曲とも演奏者はO・Y氏となっている。

1. N・U ¹⁰



2. O・Y① 曲名不明

3. O・Y② 曲名不明

この曲に付随するものとして

ト キー ト ラン ラン ト キー ト ラン ラン というリズムで歌われる歌謡がある。どの演奏者も歌のイメージをトンコリで演奏していると思われ、リズムは酷似している。

3-3 etuhkaあるいはケラツツキ
楽譜の下に演奏する弦の番号を示した。

1. N・U etuhka maa irehte

gva bassa = 96

1 2 2 3 4 4 1 2 2 3 4 4 1 5 3 2 4 3 5 2 5 3 2 4 3 5

1 3 5 2 4 3 5 1 2 2 3 4 1 4 1 3 4 1 4 1 3 4 1 4 4 1 2 2 3 4 4

1 3 3 2 4 4 1 3 4 1 4 1 2 5 3 4 4 1 5 3 2 4 3 5 2 5 3 2 4 3 5

2. K・C ケラツツキ

gva bassa

1 2 2 3 4 4 1 2 2 3 4 4 1 2 3 5 4 3 5 1 2 2 3 4 3 3

1 3 5 2 4 5 2 5 3 2 4 3 5 1 2 2 3 4 4 1 3 4 2 4 5 2 5 3 2 4 3 5

1 2 2 3 4 3 3 1 3 5 2 4 5 2 1 2 4 2 4 3 5 1

楽譜を見ると両者とも1段目のはじめに同じフレーズが2回繰り返されているが、この部分は音が違っても演奏される弦は同じである。N・U氏はこの曲はetuhka (カラス) の曲だとしているが、この曲を弾くときは

エツツキ トー エツツキ トー と弾くのだと説明している。

K・C氏はこの曲をケラツツキ (キツツキ) の曲であると説明している。esoksokiという語は、北海道でエゾアカゲラ等を、タライカで「白いキツツキ」を指すと言う報告もある [知里 1962]。したがってN・U氏の説明に出てくる「esosoki」、K・C氏のいう「ケラツツキ」が同じものを指す可能性がある。

3-4 keh keh hetane payean

1. N・U keh keh hetane payean 11

2. O・Y① kekke hetane paye an ro

N・U氏は、この曲は若い男女が誘い合う呼びかけの曲であると説明している。N・U氏とO・Y氏の演奏に類似している点はみられない。

4. まとめ

分析結果をわかりやすくまとめておく。

【音階の比較】

N・U氏とO・Y氏②：音階がほぼ同じ。

N・U氏、S・K氏、K・C氏：隣り合う音同士の音程関係が類似している。

【各曲の比較（共通要素）】

「sumari」

N・U氏とO・Y氏②：音階がほぼ同じで、メロディーラインが一部酷似している。

N・U氏、O・Y氏②、O・E氏：同じリズムを持つフレーズが存在している。
N・U氏とK・C氏：音が違っても、演奏する弦が同じ箇所がある。

「too kito ran ran」
N・U氏とO・Y氏①・②：リズムが酷似している。

「etuhkaあるいはケラツツキ」
N・U氏とK・C氏：曲名は違うが、もともとは同じテーマを持った曲である可能性がある。一部リズムと演奏する弦が同じ箇所がある。

「keh keh hetane payean」
N・U氏とO・Y氏：共通する要素はない。

5. 結論

トンコリの演奏においては、楽譜や唱歌（しょうが）等を用いた厳密な楽曲の伝承が行われたという記録はない。現存する録音を聞く限りでも、曲のほとんどの部分は演奏者の裁量に委ねられていて個人的色彩が強い。しかし、特徴的なメロディーラインやリズム、弦を弾く順番など一部に師や他の演奏者と明らかに類似している点が見られる。

トンコリ演奏の録音資料は決して多くはないためこの考えは想像の域をでないが、トンコリ演奏において、ある特定のものを連想させる共通のモチーフというのが存在していたのかもしれない。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、次の方々から多大なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。
北原次郎太氏、久保寺芙美子氏、佐々木利和氏、高橋周作氏、直川礼緒氏、田村将人氏、丹菊逸治氏、
東京藝術大学音楽学部小泉文夫記念資料室、富田友子氏、中川裕氏、村崎恭子氏（五十音順）

本稿で使用した小泉文夫氏録音によるトンコリ演奏の資料は小泉文夫記念資料室の所蔵資料であり、第三者への供与を行わない前提で、研究目的のため資料室より複製の許可をいただいております。

参考文献

- NHK放送協会編『アイヌ伝統音楽』日本放送出版協会 1965年
金谷栄二郎・宇田川洋『樺太アイヌのトンコリ』常呂町郷土研究同好会 1986年
北原次郎太「トンコリの戦後史—1945～1977年を中心に—」『社会文化科学研究』第7号 千葉大学
大学院社会文化科学研究科 2003年
久保寺逸彦「アイヌの音楽と歌謡」『民族学研究』5巻5・6号 日本民族学会 1939年
近藤鏡二郎・富田歌萌「アイヌの弦楽器 トンコリ」『音楽学』9巻（1） 音楽学会 1963年
田邊尚雄「樺太土人の音楽」『島国の唄と踊』磯部甲陽堂 1927年
谷本一之「アイヌの五弦琴」『北方文化研究報告 第13輯』北海道大学 1958年
谷本一之『アイヌ絵を聴く』北海道大学図書刊行会 2000年
千葉伸彦『北海道東部に残る樺太アイヌ文化I』常呂町樺太アイヌ文化保存会 1996年
知里真志保『分類アイヌ語辞典 動物篇』常民文化研究所 1962年

注

- ¹ 小泉文夫氏録音（1967年） 東京藝術大学音楽学部小泉文夫記念資料室所蔵
- ² 久保寺逸彦氏録音（1935年） 北海道立図書館所蔵 レコード番号VII-22（A）
- ³ 同上 VII-26（A）
- ⁴ 同上 VII-27（A）
- ⁵ 同上 VII-22（B）
- ⁶ 「権太アイヌの古謡」日本放送協会（1951年） レコード番号 NHK VC-37
- ⁷ K・C氏については、富田友子氏のご協力により、富田氏自身が採録した個人蔵の録音・楽譜資料（1962年に白糠で収録）から引用させていただいた。
- ⁸ 『アイヌ伝統音楽』より
- ⁹ 谷本〔1958〕を参考にした。
- ¹⁰ この曲のみ、NHK放送協会編『アイヌ伝統音楽』付録録音シートの演奏（1962年）を資料に用いた。録音シートの演奏は2-1の譜例1.の音階より全体が完全4度程度高く調弦されているが、第一弦の音が狂って低くなっている。括弧内は引き損じていると思われる音である。
- ¹¹ 録音の演奏では、第一弦と第四弦の音が狂って半音程度低くなっている。

施設紹介 札幌市アイヌ交流センター ～ サッポロピリカコタン

札幌市がアイヌ文化に対する理解を深め、交流の場とすることを目的として設立した施設である。市街中心部から国道230号線を南へ車で約40分、温泉地として知られる南区小金湯に位置する。

屋外にはチセ、アシル、エペレセツなどが並び、水の流れを利用した脱穀装置も設置されている。センター内に入ると、まずロビーのオブジェが目を引く。広いロビーに休憩スペース、廊下に並ぶ展示品、書籍などを揃えた情報検索コーナー、ここまでは無料で利用可能だ。奥の展示室と、貸室、ホール等は有料。187席ある交流ホールは、席を収納して多目的に利用することもでき、ホールの他にも会議室、木皮加工室、染色室、調理室など、文化体験型施設として立派な設備を誇っている。

展示品は開設にあたり新たに製作されたものであり、物が目の前にあって触れることができるのが特徴である。展示品の数も豊富で、バーコード検索で展示品に関するデータを表示するシステムが備えられている。「アイヌ語クイズ」や「ブドウのツルの輪投げ」、トンコリやムックリの音が出せる「ピリカピアノ」など、遊びながら体験できる展示も工夫されている。民具の解説などにはまだ改善の余地が感じられるが、私は2度訪れて、2度めには展示解説等が前よりも少し詳しくなっていた。平成15年7月にオープンしたばかりの若い施設ということもあり、日々工夫が続けられているようだ。

札幌市は、北海道で唯一の政令指定都市であり、およそ187万人の人口を抱えている（平成16年11月1日現在）。例えば、市内の小学生全員が卒業までに一度サッポロピリカコタンを訪れるとすれば、今よりもずっと身近にアイヌ文化の一端を感じられる大人が増えるだろうし、アイヌ研究者も増えるかも知れない。今後が期待される施設として、ご紹介申し上げる次第である。（楠本克子）

【所在地】札幌市南区小金湯27 TEL 011-596-5961

【展示室観覧料】一般200円、高校生100円 貸室料金は半日単位350円から